

小林恭子の ロンドン発 グローバル随想

第12回

市民同士の助け合い



イラスト・題字：長峯亜里

新型コロナで「ロックダウン」

新型コロナウイルスが世界中で感染者を拡大させる中、英国は3月末から「ロックダウン(封鎖)」状態となった。

全国民が「自宅にこもる(stay at home)」ことを要請され、外出できるのは食料を含む生活必需品や医薬品を買うため、あるいは散歩やジョギングなど運動のため、あるいはどうしても自宅外で働く必要があって仕事に出かけるときのみだ。自宅勤務が奨励され、同居していない家族や友人と会ってはいけないという。外出時には、他者と2メートル以上の距離を取らなければならない。

不要不急とされる店舗には閉店令が出た。レストラン、パブ、バー、スポーツクラブ、ホテル、レジャーセンター、映画館など。同居していない2人以上が集まることも、原則禁止だ。こうした決まりに違反する人には60ポンド(約1万円)の罰金が科せられる。すでに学校は休校措置が取られている。

一連の閉店で経営が厳しくなった企業およびフリーランスの人、慈善組織には政府が財政支援を行うことになった。

これほどの行動制限下で、日常の生活はどうなっているかということ、仕事に行けなくなった

人を除けば大きな窮屈さがあるわけではない。

散歩やジョギングを楽しむ人たち

一時はトイレットペーパーが小売店の棚から消えて不自由な思いをしたが、現在はほぼ全ての品目が提供されている。商店街は大部分が閉店となり、レストランやカフェはテイクアウト専門になった。スーパーでの買い物は最初に店の外に並び、1人ずつ店内に入る。レジの前の床にはテープが貼られ、前後にいる人との間に2メートルの距離を置くように設定されている。

外食や旅行に出かけられないため気晴らしには工夫が必要で、通りを歩けば、買い物に行くか、ジョギングや散歩をしている人々が目に付く。一見、「のどかな日曜日」という印象を与えるが、生活環境の激変や欧州他国の感染状況のニュースで気分が落ち込むのも事実だ。

リモートで会見、閣議も

「家にこもる」を中心とする「社会的距離」(social distancing)戦略を主導したジョンソン英首相、そしてハンコック保健相も感染者となってしまったが、首相は官邸内の自室からリモートで閣議を開催した(4月5日から一時入院)。閣僚を中央にし、科学および医療の専門家2人が両側に並ぶ記者会見が毎日開かれているが、